

査読論文

みずからを語る霊媒 Medium who speaks of oneself

「哲学学」批判についての試論 An Essay on Japanese Academic Philosophy

伊藤 潤一郎¹

ITO Junichiro

This study aims to demonstrate a new way of reading papers in Japanese academic philosophy, commonly called “Tetsugaku-gaku.” In *Le partage des voix*, Jean-Luc Nancy shows that interpreting is not a simple transmission of the meaning of the original text, but an act in which the interpreter adds obscure meanings to the original text. From this point of view, this paper proposes a different approach to “Tetsugaku-gaku.”

キーワード： 日本のアカデミックな哲学、解釈、ジャン＝リュック・ナンシー

Key words： Japanese academic philosophy, interpretation, Jean-Luc Nancy

1 はじめに

日本のアカデミックな哲学論文はつまらない。あるいは、日本のアカデミックな哲学論文は何を書いてあるのかよくわからない。アカデミアで専門的に哲学を研究していないひとからこのような感想を聞くことは多い。一般に、専門的な議論はいくつもの文脈を踏まえて徐々に積み重ねられていくものであり、それまでの研究史や前提とされている問題意識を共有できない場合には、そこで何が問われているのかわからないのは当たり前といえども、あたり前だといえる。しかし、こと哲学に関しては、ふつう「哲学」という言葉でイメージされるものと、アカデミックな哲学の論文のあいだの乖離が激しいのもたしかだろう。一般的な哲学のイメージが、自分の頭で考えた思考の結果や各人の世界観や人生観であるとしたら、「カントにおける矛盾律について」や「デカルト『情念論』における心身問題について」といったタイトルのア

カデミックな論文が、そうした哲学のイメージから遠いものであることはまちがいない。

日本のアカデミックな哲学は、俗に「哲学学」と呼ばれ揶揄されることがあるが、このとき批判者が念頭に置いているのは、まさに「過去の哲学者における重要概念について」型の論文なのだろう。「日本の哲学研究者は哲学をしているのではなく、過去の哲学者について研究しているにすぎない、重要なのは自分自身で哲学することなのに」という批判は、現状の表層だけをみれば理解できないものではない。たしかに、「…における…について」型の論文は多い。しかし、ここにあるのは「哲学学」と批判しただけで、そう簡単に済ませられる問題なのだろうか。むしろ、先行する哲学者のテキストを解釈するという行為において、何が生じているのかが問われなければならないのではないのか。そのような視点に立つならば、ここで問われるべきは、そもそも「哲学学」なるものが実際に成り立つのかという根本的かつ原理的な問題だと

いうことになるだろう。

この問いにアプローチするために、本稿ではジャン＝リュック・ナンシーの『声の分有』（1982年）を手がかりにしたい²。というのも、ナンシーのこの著作は、解釈学をテーマとしており、解釈という行為がいかなるものであるかを根本的に問い直すものだからである。「哲学学」批判に応答するには、そもそも「…における…について」型の論文でおこなわれている、解釈という営みを捉えなおすことが欠かせない。プラトンの『イオン』に登場する吟唱詩人を論じることによって、解釈という営為に独自の視点から光を当てるナンシーの小著に対して、本稿ではさらにメディア論の視点を持ち込むことで、何かについて論じるという行為をより原理的に把握してみたい。その結果、何かについて論じている者とはメディアにほかならず、いわゆる「霊媒」のような存在であることが明らかになるだろう。そして、何かについて論じている者は、特異な自分自身を語っているということも同時に浮き彫りになるはずである³。それゆえ、結論を先取りして述べるならば、日本のアカデミックな哲学論文を「哲学学」と批判する者は、この特異な自分自身を読めていないのであり、よき「霊媒」たりえていないのである。本稿では、この地点に向けて論を進めていきたい。そのためにまずは、「…について」というあり方を分析するところからはじめよう。

2 誰でもよい私が書く「…について」

「…における…について」というアカデミックな哲学論文における典型的な型を痛烈に批判しているのが森岡正博である。1986年ごろに日本倫理学会で森岡がおこなった発表をもとにした「現代日本の哲学をつまらなくしている三つの症候群」では、「手がかりにして」症候群、「次の機会に」症候群」とともに、「一における」症候群が、「頹落したアカデミズム」に

蔓延るものとして挙げられ、次のように特徴づけられている。

このようにして、アカデミズムはいまや、特定個人の文献研究にしか興味を示さなくなった。それどころか、この傾向はさらに徹底して若手研究者に受け継がれ、彼らはもはや特定個人の文献の特定の箇所にはしか興味を示さない。たとえば、日本倫理学会の学会誌である『倫理学年報』や、日本哲学会の学会誌である『哲学』の投稿論文の目次を見ていただきたい。ここにみられるのは「誰々における何々問題について」の洪水である。これを「一における」症候群と呼びたい。

考えてみれば、大学院期間とは、いかにして重箱の隅をつつくような論文を生産するかという技術を学び、またそのような論文を発表することがとりもなおさず「倫理学」である、と信じ込まされる期間である。研究室では「一における」論文の生産にはげみ、自宅に帰ってはじめて、自分が本当にやりたい思索に没頭するという「二重生活」を送っている同僚もいる。

しかしどう考えてもこれは健全な姿ではない⁴。

学会誌に査読付きとして掲載されている論文に「一における」論文が多いことは、2022年のいまでも大きく変わるところがない。ただし、それが本当に「重箱の隅をつつく」だけのものかは考えなければならないだろう。先にも述べたように、そのようにみえることはたしかだが、「自分が本当にやりたい思索」と「重箱の隅をつつく」ことは、「二重生活」と形容できるほど切り離されているのだろうか。

ここでは、森岡が「一における」論文と呼んでいるものが、多くの場合「一における…について」というかたちであることを踏まえ、力点を前者から後者に移して、「…について」論文」と言い換えてみたい。「一における」と

言うときの、「一」の部分はたいてい人名であり、そこに入る人名の選択肢自体が、日本のアカデミアではふるいにかけられ選別されており、そこにもまた日本のアカデミックな哲学が抱える問題があるが⁵、さしあたりこの点については措いておこう。いまおこないたいのは、「「一における」論文」から「「…について」論文」へと視線を移すことで、問うべきポイントを、アカデミックな哲学論文の主流が固有名研究であるという論点から、そうした論文の形式性へと移動させることである。

「プラトン『パイドロス』における書かれた言葉について」といった論文において、「…について」の「…」という部分は論文の考察対象を示している。ほかのものではなく、「…」という対象に限定して考察を加えるということだ。「一において」によってある固有名ないし思想潮流へと限定したうえで、さらに「…について」で限定を重ねる論文は、たしかに重箱の隅をつつくようにみえ、細分化され蛸壺化しているという印象を与える。

しかし、「…について」という論じ方の核心は対象の細かさではなく、むしろ対象と論者の関係性にあるだろう。簡潔に言えば、「…について」という形式は、アカデミックな論文に必ず要求される客観性によって生み出されたものだといえよう。対象と論者のあいだに距離が置かれることで、対象は論者からの影響を受けることがなくなり、客観性の光のもとに照らし出されることができるようになる。そうした対象と論者の隔たりを示しているのが、「…について」という言い回しなのである。

「…について」という表現が示すこうした客観性は、平尾昌宏によれば、学術論文で用いなければならないとされる「〈である体〉」と人称の関係からより明確にすることができる。

学術論文などでは、書き手である一人称は「私」という一人称単数を特権化せず、自らを複数化する。それによって客観的な視点を確保しようとしているのだろうが、

そればかりではない。それが語る対象が一人称とは区別された三人称であるという意味でも客観性を保持しようとする文体なのである。

〔…〕

〈である体〉の客観的用法では、「書き手」は語られている対象へと一直線に注意を向けている。この用法では、語られる対象の側に強く焦点が当たっており、読者は特権化されない書き手である「我々」と、いわば横並びに対象を見ている格好になる。その意味では、書き手の一人称は単に特権化されないというよりは、むしろ個別化されずに、読者を含む形で極端に一般化されているとすることができる⁶。

平尾がきわめて明晰に分析しているように、学術論文の〈である体〉においては人称をめぐる複数の操作を介して、客観化が図られている。「私」ではなく「私たち」という一人称複数を用いられることによって、その論文が「私」という一人称単数の主観によるものではない客観性を備えていることが示され、それと同時に論文の考察対象が三人称（論文の書き手である一人称と論文の読み手である二人称の外にあるもの）の位置に置かれることによっても客観性が生み出されている。さらに、論文の読者である二人称が、「私たち」という一人称複数と同じ目線の位置に立つことで、実質的には二人称が一人称複数へと吸収され、一人称複数（＝論者＋読者）と三人称（＝対象）という二項構造ができあがる。「…について」という言い回しが示しているのは、まさにこの構造のことだろう。

このように、論文において「…について」という表題が頻出するのは、それが客観性という学問の理念と不可分だからだといえる。論者は客観性を保持するために、みずからを複数化し、読者をもそこに巻き込み、ほかならぬこの「私」が論じているという事実を消し去っていく。学術論文において「私たち」として語る

「私」とは、「私」以外の任意のひとつと入れ替え可能な、誰でもよい私なのである。交換可能な存在へとみずからを変化させ、「私」の唯一性を極限的に切り詰めていくことで、逆説的にもはじめて「私」は論文を書くことができるのだ。

以上を踏まえれば、「…について」論文とは、客観性を確保するために、対象と論者を分離し、さらに論者を「誰でもよい私」へと変換した論文とまとめることができるだろう。一般的な哲学へのイメージが、そのひとつに特有の世界観や人生観を語ることだと考えられているのなら、「私」を消し去る「…について」論文とは、最も哲学から遠い書きものにみえるにちがいない。しかし、「…について」論文にも、「私」は姿を現しているのではないか。いかに消し去ろうとしても、「私」は消えないのではないか。次節では、ナンシー『声の分有』を手がかりに、「…について」論文における「私」の位置づけに迫っていききたい。

3 吟唱詩人と特異性

1982年に出版されたジャン＝リュック・ナンシーの『声の分有』は、ナンシーによるはじめてのハイデガー論だと言われることが多い。ただし、それはハイデガーという対象について客観的に論じるものではない。おおまかに議論の概略を示せば、まずこの著作で問われているのは解釈という行為であり、また解釈についての考察としての解釈学である。こうしたテーマにアプローチするために、ナンシーはハイデガーの『存在と時間』と『言葉についての対話』を読み解き、さらに後者で言及されるプラトンの初期対話篇『イオン』への遡行が企てられている。つまり、『声の分有』は、プラトンを読むハイデガーをナンシーが読むという構造になっており、同書のなかではたびたび「入れ子構造」の重要性が言及されるが、この本自体がその構造の実演となっているわけである。

さらに手が込んでいるのは、プラトンの『イオン』で語られている内容もまた、こうした解

釈の連鎖についてであるところだ。『イオン』という対話篇において話題の中心となっているのは、吟唱詩人イオンがもつ風変わりな能力である。吟唱詩人本人が述べるによれば、イオンがうまく朗唱することができるのはホメロスに限られるのであって、たとえ同じ内容の詩であっても別の詩人によるものは朗唱できないという。つまり、吟唱詩人イオンの能力は、語られている内容ではなく、語っている人間と関連しているということだ。

『イオン』においてソクラテスは、吟唱詩人のこうした能力がある限定された領域における技術的な専門知とは異なる知のあり方だと指摘する。

君はホメロスについて、技術と知識を用いては語ることでできない人だということだ。なぜなら、もし君がこれのできる人だとしたら、ホメロス以外の他の詩人についても、語ることはできるはずだからね。⁷

つづけてソクラテスは、この技術知とは異なる能力を、詩人と吟唱詩人の憑依関係として説明していく。もともと詩人はムッサの女神に憑依されることで詩作をおこなうとされ、「詩人というものは、翼もあれば神적でもあるという、軽やかな生きもので、詩人は、神気を吹きこまれ、我を忘れた状態になり、もはやみずからのうちに知性が存在しなくなったときにはじめて、詩を作ることができるのであって、それ以前は、不可能なのだ」⁸と指摘されていた。ムッサと詩人のあいだの憑依関係は、詩人と吟唱詩人のあいだでも同様に生じ、ここに一種の連鎖が形成される。

ある詩人にはこの吟唱詩人が、他の詩人には別の吟唱詩人が、という具合に、異なった吟唱詩人たちがつながっており、もとの詩人たちから靈感を吹き込まれている、たとえば、ある吟唱詩人たちはオルペウスに、他の詩人たちはムサイオスに、とい

うように。⁹

かくして、〈ムッサ→詩人→吟唱詩人〉という憑依の連鎖が形成される。ナンシーの『声の分有』において論じられる『イオン』の議論の大きな枠組みは以上のとおりだが、それではこの憑依の連鎖は、解釈という行為にとってどのような意味をもっているのだろうか。ここでは、本稿の問題関心に従って、解釈の連鎖と意味の伝達がいかなる関係にあるのかという点にのみ注目したい。

解釈にはいかなる意味の根源もなく、解釈においてはいかなる意味も完成することがない。ただつねに他なるものである告知がそこでは解き放たれている。それはまさに他なるものの告知である。〈他なるものの言説〉一般の根源を受け持つような何らかの大文字の〈他なるもの〉の告知ではなく、他なるものが他なるものであるということ（他なるものがけっして「一般」的ではなく、つねに特異性のうちにあるということ）の告知、そしてその度ごとに特異で有限なこのような他性について、そしてこのような他性のうちでコミュニケーションするのではないような言葉は存在しないということの告知である。¹⁰

解釈において問題となるのは意味の同一性ではない。何よりもまずここで批判されているのは、同一性をもった意味の存在を前提とし、解釈という行為によってその意味が復元されて伝達されるという発想である。過去の哲学者たちの難解なテキストを読み解き、その真の意味に迫るという考え方は、テキストのなかには真正で同一的な意味が隠されているのだが、いまはそれが見えなくなってしまうという一種の疎外論に立脚している。いつしか解釈が積み重ねられ洗練され精緻になっていくことによって、誰にとっても明らかで真正で同一性を備えた意味が現れるということだ。

ナンシーは、解釈学がこのような発想に支配されていることを批判するわけだが、これは前節でみた学術論文の客観性に対する批判としても読むことができるだろう。なぜなら、誰の眼にも明らかなものとして現れる対象とは、同一性をもち変化しない不動の対象であるが、まさに解釈という行為は対象をそのようなものとして現れさせることを目指すものだからである。別の言い方をすれば、学術論文の書き手は、対象を誰にでも理解可能な一般性のもとに置くことを目指しているのだが、『声の分有』で語られている解釈とは、そのような対象の一般性を明らかにすることではけっしてない。

むしろ、解釈という行為が関係するのは「特異性 (singularity)」である。ナンシーにおける特異性という概念は、一面的な理解を許すものではないが、ここではそれが意味の一般性という側面とは異なるものであり、解釈という行為のなかで現れてくるものであることをひとまず押さえておけばよいだろう¹¹。解釈においては、同一性をもった意味が伝達されたり復元されたりするのではなく、それぞれの解釈者によって異なる意味が生み出されていく。解釈が重ねられることによって、誰にとっても妥当する意味の一般性が形成されていき、それ以外の解釈の可能性が排除されていくのではなく、解釈者それぞれが別様の意味をそこに付与するような、デリダやナンシーの言葉づかいに倣えば意味の「代補」を生じさせるような行為こそが解釈なのである。それゆえ、解釈とは意味を「他化」させることであり、その「他化」の契機となるのは、解釈者であるほかならぬ「私」なのである。対話篇『イオン』の争点が、語られている内容ではなく、誰が語っているかということにあったように、解釈において問われているのは誰が解釈しているかということなのだ。学術論文が「私」を「誰でもよい私」へと変換することは先に見たとおりだが、ナンシーの『声の分有』に沿って考えるならば、そのような不特定多数へと埋没することのない「私」こそが、解釈においては問われているといえよ

う。

4 霊媒は不透明な自己を語る

『声の分有』で論じられている吟唱詩人は、メディア論的な観点からみても非常に重要な存在である。メディア論と一口に言っても幅広いが、ここでは「メディア」という語そのものの意味を考えたい。周知のように、英語の《media》は《medium》の複数形であり、またこの語にはいわゆる「メディア」だけでなく「霊媒」という意味がある。何かと何かのあいだに存在して媒介するものという最も基本的な意味を踏まえれば、神と人間のあいだを媒介するのが「霊媒」であることは理解できよう。イオンのような吟唱詩人は、まさにこの「霊媒」の位置を占めている。プラトン自身が吟唱詩人を「取つぎ人の取つぎ人＝解釈者の解釈者[ἐρμηνέων ἐρμηνῆς]」¹²と呼んでいるが、これに倣えば吟唱詩人とは霊媒の霊媒だといえる。前節で確認したように、すでにしてホメロスのような詩人自身がムウサの声を取ついで解釈する者であったのだから詩人も霊媒であり、その詩人の声を解釈する吟唱詩人は解釈者の解釈者、すなわち霊媒の霊媒なのである。

霊媒は一般に神の声を伝えるとされるが、『声の分有』の議論を踏まえれば、神の声が透明に歪みなく伝えられることはけっしてない。むしろ、霊媒は神の声に何かを付け加え、それを差異化する。「メディアがメッセージである」と述べたのはマクルーハンだったが、まさに霊媒である吟唱詩人のほうがメッセージを発しているのである¹³。

ただし、霊媒のほうがメッセージであるということは、霊媒にとってみずからが発するメッセージが完全に透明なものということではない。《Medium》という語には、辞書で「生活条件、生活環境」などといった訳語があてられる意味もあることを思い起こしたい。たとえば、音が存在するための条件としての空気がそれにあたる。メディアとは、あるものの存在を可能

にする条件、哲学の術語で言えば「可能性の条件」でもあるのだ。そして、みずからの可能性の条件を認識しようとしても、その認識自体が可能性の条件のなかでしかおこなわれえないように、可能性の条件とは認識主体が距離を取って客観視することのできないものにほかならない。それゆえ、メディアとしての霊媒は、おのれから離れてみずからを完全に客体の位置に置くことができないのである。

ナンシーが、吟唱詩人の解釈において生み出されるのが一般性ではなく特異性であるとしていたのもこの点に関わっている。吟唱詩人は、みずからがおこなっている朗唱を完璧に外から眺める視点をもっておらず、そこには必ず盲点が存在している。解釈者は、みずからの解釈をくまなく客体化して語るような視点に立つことはできないのであり、それが特異性ということにほかならない。デリダが述べているように、「代補に対する盲目は法」¹⁴なのだ。しかし、この盲点があればこそ、解釈という行為において同一性に回収されえない他性が生じてくる。解釈者がみずからの解釈を完全に把握しえないということは、解釈者自身にとってもみずからの解釈には他なる部分があるということだ。解釈をおこなうとは、まさに解釈者がみずからのメッセージを付け加えると同時に、そのメッセージが解釈者自身の手からもすり抜けていくことを意味する。霊媒はみずからを語るとき、自身にとっても異質な自己を語っているのである。

5 「…について」論文を別様に読む

アカデミックな論文では、「私」が消し去られ「私たち」が主語の座を占めるのだった。「私」から「私たち」へという操作こそが、アカデミックな客観性を保持するわけだが、これまでの議論を踏まえれば、「私たち」を「私」へと引き戻すこともまた可能なのではないだろうか。「誰でもよい私」が語っているかのよう

にみえる学術論文のなかにも、ほかならぬ「私」がひそんでいるのではないか。「…について」というかたちで客観性の形式を纏った論文にもまた、解釈者の特異な声が入り込んでいる。解釈者という霊媒が存在するかぎり、霊媒は自己を語るものであるから、そこには必ず何らかの差異が忍び込み、霊媒の声が反響している。

そして、その声は霊媒自身にとっても不透明な声なのだった。解釈者自身にさえ完全に把握できない何かが解釈のなかには存在するがゆえに、その特異な声は他の解釈者を呼び招く。〈ムウサ→詩人→吟唱詩人〉という連鎖を形成する声は、吟唱詩人で止まるわけではない。吟唱詩人の朗唱は、それを聴く者によってさらに解釈され、この連鎖は原理的にとどまることがない。そうであれば、「…について」論文のようなアカデミックな論文において問うべきは、それを読む者のほうだろう。アカデミックな哲学論文が「哲学学」と呼ばれ、揶揄し批判されるとき、たしかに「…について」や「私たち」といった型にはまった形式や過去の哲学者ばかりを扱うという主題の選択がそうした批判を呼び招いているのはまちがいない。しかし、いかに無味乾燥にみえる論文でも、読者のほうでそこに解釈者の特異な声が響いているかのように読む可能性は開かれているはずなのだ。それは簡単なことではないかもしれない。しかし、そこで解釈がおこなわれているかぎり、読者の手によって特異な声を響かせることは、原理的にはどのような場合にもできるのである。「哲学学」と批判して満足することは、みずからの解釈能力の不足を棚に上げることにもつながりかねない。それゆえ、アカデミックな哲学論文を「哲学学」と批判する前に、読み手もまたよき霊媒にならなければならないのである。

ような「手がかりにして」症候群があると述べている。「たとえば「カントとともに次の問題を考えてみよう……」とか、「ヘーゲルを手がかりにして次の問題を考えてみよう……」と述べて、全編、カントやヘーゲルからの引用を切り貼りする。要するに自分の頭で問題を考えることを放棄し、カントやヘーゲルに考えてもらっている。うがったみかたをすれば、彼らは始めから、問題そのものについては責任回避ができるような形式で、論文を書いているのである。これを「手がかりにして」症候群と呼ぶことにする」(森岡正博「現代日本の哲学をつまらなくしている三つの症候群について」、『森岡正博全集第1巻』、kinokopress.com、18頁)。本稿は、ナンシーの『声の分有』を「手がかり」にするが、しかしここでの「手がかり」とは文字どおり問題に迫るための糸口であり、ある意味では道具とさえ呼べるようなものであって、ナンシーに考えてもらうことではない。私たちは『声の分有』というテキストをメディア論的に「霊媒」という観点から読み解いていくが、それは『声の分有』を逐語的に注釈することではなく、まさにこの著作をテキストとして扱い、そこにメディア論という糸を織り込むことによって、問いに迫るための有用な道具に作り変える作業なのである。

³ 本稿と同じ方向性の先行研究として、次のものがある。横田祐美子「わたし、変換器——怖れ知らずの哲学序説」、『現代思想』、第50巻第10号、青土社、2022年。そこでは、「哲学をつくるということは、まさに私がひとつの変換器であり、他者の思考を通じて新たな思考を生み出すことを怖れないことではないだろうか。そのとき、「私」は「私たち」に同一化されえない書き手としてエクリチュールのなかに現れ、アカデミックな哲学の論文を攪乱するスキャンダルやトラブルを生じさせることになるのである」(164頁)と述べられている。本稿は、横田によるこの主張の妥当性をナンシー『声の分有』を介して確認するとともに、さらにそこから一步踏み込んで、「私たち」として書かれている学術論文のなかに「私」を読み取る必要性があることを示すものである。

⁴ 森岡正博「現代日本の哲学をつまらなくしている三つの症候群について」、17頁。

⁵ たとえば、フランス哲学の軽視という問題が挙げられる。この点については、以下を参照。横田祐美子「日本のフランス哲学受容をめぐる諸問題の解明に向けて」、『立命館言語文化研究』、34巻2号、立命館大学国際言語文化研究所、2022年。

⁶ 平尾昌宏『日本語からの哲学——なぜ「です・ます」で論文を書いてはならないのか?』、晶文社、2022年、154-156頁。

⁷ プラトン『イオン』森進一訳、『プラトン全集 第10巻』、岩波書店、1975年、124頁、532C。プラトンからの引用は、慣例にしたがい最後にステファヌス版全集の頁数を記すとともに、訳文は基本的に日本語訳に依拠しつつ、一部表記を変更している。

¹ 新潟県立大学国際地域学部講師

² のちにも見るように、森岡正博はアカデミックな哲学が抱える三つの症候群のひとつとして、次の

⁸ 同書、129頁、534B。

⁹ 同書、135頁、536B。

¹⁰ Jean-Luc Nancy, *Le partage des voix*, Galilée, 1982, p. 85. [『声の分割』加藤恵介訳、松籟社、1999年、78頁] なお、原書を示した引用文においては、日本語訳を参照しつつ、引用者が新たに訳出しなおしている。〈 〉は原文で大文字から始まる語を示す。また、強調はすべて原著者に属する。以下同様。

¹¹ ナンシーにおける特異性には、少なくとも「個的単独性」、「行為の一回性」、「意味の他化の運動」という三つの側面がある。この点について詳しくは以下を参照のこと。伊藤潤一郎『ジャン＝リュック・ナンシーと不定の二人称』、人文書院、2022年、第4章。

¹² プラトン『イオン』、132頁、535A。

¹³ マクルーハンにより即して述べれば、「メディアが

メッセージである」とは、メディアがもたらす「スケール」、「ペース」、「パターン」のことを指している。「いかなるメディア（つまり技術）の場合でも、その「メッセージ」は、それが人間の世界に導入するスケール、ペース、パターンの変化にほかならない」(Marshall McLuhan, *Understanding Media: The Extensions of Man*, MIT Press, 1994[1964], p. 9 [『メディア論——人間の拡張の諸相』栗原裕・河本仲聖訳、みすず書房、1987年、8頁])。霊媒としての解釈者は、たとえばそこにみずからの語調（トーン）を介入させることで、異なるスケールやペースやパターンを生み出していると考えられるだろう。

¹⁴ Jacques Derrida, *De la grammatologie*, Minuit, 1967, p. 214. [『根源の彼方に——グラマトロジーについて（下）』足立和浩訳、現代思潮新社、1972年、15－16頁]